

赤と青・色盲殺

人事件

マリモ

水桶善太郎

水桶善太郎。五十五歳。村役場の小使いさん。

のどかな田園風景の広がるへんぴな片田舎に住んでいる。

趣味はガラにも似ず、「録音」だ。

小鳥のさえずりとか、小川のせせらぎ。そんなのを録音してうちでゆっくり聞く。こんなに楽しいことはない。録音趣味が高じて宴会や会議など人々のざわめきや会話、村の「おばさん達の会話までとってしまっていたりする。

気弱な性格で結婚相手もいなかったんだけど三ヶ月前にやっと結婚した。その相手というのはなんと30歳年下のフィリピン人だ。名前はアニーと言った。一年間、毎晩のようにフィリピンパブに通い詰めて金を貢いだ。そしてありとあらゆる手を使って善太郎なりに努力して口説き落とした末の結婚だった。

善太郎の仕事は単純だ。主に環境整備係。というとさわやかだが要するに掃除係だ。使い走りもする。

毎日の定期的な仕事といえば、隣町にある役場との連絡係のような仕事だった。

毎朝午前十時と午後四時。この二回。

時間きっかりに役場を出て隣町まで軽トラックを走らせる。書類運搬をするのが重要な役目でもある。

何せへんぴな村で車もあまり通らない。こういう運搬の役割が必要だった。

山盛和夫という男

ここに一人のおとこがいる。

目つきは鋭く、一見ヤクザ風だ。

ある日の午後、この男は村役場を訪れた。役場の所長に用事があるという。

小使い係の善太郎はもうすぐ4時になるなと思いながら運搬する書類を整理していた。

そこへ所長と山盛が顔を出した。用件が終わったらしい。

「水桶君悪いけど、この方を隣町まで一緒に乗せて行ってあげてほしいんだ」

所長は善太郎にそう言った。

わけもないことだ。どうぞお乗りください。

隣町へ行くには何せ二つの峠を越えなければならない。一つめの峠の中腹あたりで道路工事をしている。

そこは通称、「大曲の急カーブ」と呼ばれている場所だ。去年の台風で道路が崩壊してからというものずっと

そこは工事中だ。片側通行になっている。工事用の信号が取り付けられていた。

善太郎は軽トラに男を乗せたものの、何か気詰まりだ。男は無口でなんかこわそうだ。居心地の悪い雰囲気振り払

うように、

「えっと、今日は十月の十一日ですね・・・」とか「去年の台風でここの道路もめっちゃめっちゃになりました」とか、

とりとめのないことを言っている。男は、ふむ、とか、ああ、とか相づちを打つだけだ。どうも取っつくしまがない。

車の中から見ると向こうの丘に一面に赤い彼岸花が咲いていた。

「おお。彼岸花が綺麗だなあ・・・」

それを見て男ははじめて口を開いた。

それをきっかけに、善太郎はまたしゃべり出す。

「ええ綺麗ですね。でもね、旦那・・・」

アニーは仕事に

善太郎が家に帰ると30歳年下のフィリピーナのアニーは化粧台に向かっていた。

「今夜は、ちょっと遅くなるよ」

アニーはそう言って香水の匂いをまき散らしながら出て行った。遅くなるのは毎度のことだ。晩ご飯をすませると善太郎は庭に出た。猫の額のような小さな庭だけどあちこちで虫が鳴いている。

これがたまらない。鈴虫の音色は実にいい。

音録りキチガイの善太郎は小さなボイスレコーダーと集音マイクを垣根の庭にセットした。後で虫の声を再生するのが楽しみだった。

衝突事故発生

その翌日、水桶善太郎は死んだ。

隣町へ行く峠の工事用信号機のところだった。定期の乗り合いバスとの正面衝突だった。

軽トラは無惨にもぺっちゃんこだった。近くには何人かが作業していた。凄まじい衝突音がしたと思って振り向いたら

すでに軽トラはバスの前部にめり込んでいたという。

またそのうちの一人は、軽トラもバスもどちらも減速せずにカーブの中に突っ込んできたと言っている。

バスの運転手は、

「私は、間違いなく信号が青になるのを確認してから進みました」という。

バスの乗客も「信号が青になってからバスは発進しました。私は一番前に座っていたから見てました。間違いのないで

す」と証言している。

信号を無視したのは善太郎の軽トラであることは事実のようだった。

なぜ信号無視したのかということは疑問として残るが、とにかく現場検証結果からは事件性はないという結論になっ

た。善太郎の死は交通事故による死亡ということで処理された。

K市警察、生活安全課の警部補、多々良一郎はぼさぼさに伸びた髪の毛を掻きむしった。

低くうなりながら目尻のあたりに難しい皺をよせた。

机の上に置かれた番茶をずるりとすすると目の前にいる半田太郎に話しかけた。

半田は後輩の巡査部長だ。

「どうにもわけがわからねえよな。あの衝突事故」

「またこだわりの多々良さんの悪いくせですか。何でも事件にしたがるんだから」

半田は揶揄するように多々良のしわくちゃの顔をちらりと見た。

「赤信号で入るなんて自殺行為だからな。どう考えても不自然なんだよ」

「あまり考えすぎない方がいいんじゃないですか」

半田は机の上に目を落としながら気乗りしない口調で言った。多々良は小さく舌打ちするとその太い眉を手の平で

ごしごしこすった。

興奮すると自分のげじげじのようなその眉がかゆくなってくるのだ。

多々良はこの事故に引かかっていた。

水桶善太郎は定期的に毎日、決まった時刻に決まったように軽トラで連絡往復している。

その水桶が、なぜ慣れているはずのあの道をその日に限って赤信号で突入したのか。

検証の時もそのことを口が酸っぱくなるほど署長にも進言したが結局取り上げてもらえなかった。

事件だということを証明するのは確かに難しい。署長とて下手に事件としての判断はくだせないのはよく

わかるが、だがどうしても疑問が残る。

多々良は非番の日に単独で調べることにした。

多々良が動く

多々良は役場の所長を訪ねた。

「水桶はここ十年間、いつも精勤に十時と四時にはきっかり必ず配達をしてました。ハンで押したようにね。十年間

無事故無違反です。私にはですからこの事故が信じられないんです」

所長は遠くを見るような目でそう言った。

善太郎は今年の夏に若いフィリピン人と結婚している。事故調査の時に他の署員がその事を聞き込みその報告は

多々良も受けている。担当署員も当然フィリピン妻からも詳細に事情聴取をしている。

だが特にフィリピン妻の関係からは不審な点はないという報告だった。

「所長さん、。最近彼が悩んでいるとかそんなことはありませんでしたか」

念のため聞いてみる。

「いえ、そんなそぶりを見せたことはありません。こうして仕事ができ結婚もできて幸せだ、みたいなことを言っ

たからねえ」

なるほど。多々良は礼を言って所長と別れた。

相手がフィリピーナであれ五十五歳であれ新婚ほやほやだ。いわば人生の一番楽しい時ではないか。自殺を図る

理由がない。それに善太郎が覚醒剤などのヤクをやっていたという気配もない。幻覚で信号を突っ切ることはよくある

パターンだがその線はない。

だが。若いフィリピン妻・・・。

これが引っかかっている。報告では不審な点はないというが何かあるはずだ。

そうだ。たとえば、保険金をかけているとか。うん。その線はおおいにある。

多々良は頭を掻きむしった。

保険金殺人

亭主に保険金をかけて殺害する事件は古今東西はいて捨てるほどある。

しかも女の犯罪の陰には必ず男がからんでいるから不思議なものだ。多々良はそんなことを考えながら歩いてい

る。水桶の妻も、日本人と結婚したとなれば国籍を取得しているだろう。それは調べればわかる。だが、夫が死ね

ばその資格を失う。保険金は受取人を妻の名義にしておけば手に入る。

亭主が死ねば日本国籍は解消され、妻はフィリピンに帰らざるを得なくなる。

合法的に大金を手にして自分の生まれた国フィリピンに帰ることができる。こんな都合の良いストーリーはない。

保険会社を訪ねると担当者が出てきた。

「水桶さんの場合は死亡時五千万円の保険をかけておられます。加入は今年の四月十五日受け取り人は奥様の名義になっております」

「当然、お宅の保険会社でも事故調査はされたと思うがね、この件をどのように分析されてますか」

「私どものほうでも、いくつかの疑問点など調査いたしましたし、私どもなりに慎重に検討しました」

と担当者はじっと多々良の目を見つめながら答える。

多々良は目を細めながらたたみかけた。

「赤信号進入は当然道路交通法違反です。本人の自殺行為に等しいわけだが、あなたの会社ではその場合でも

保険金は支払うわけですね」

多々良は得意の上目使いでじろりとその担当者を見つめた。

判明した事実

多々良が聞き込んだ中で判明したこと。

保険会社の契約条件

1 契約内容が何種類かある。

- ・死因が不自然な場合は出ないもの。
- ・本人の何らかの過失があっても容認範囲であれば何割か出すというもの。
- ・あるいは交通違反による死亡の場合でも違反が悪質故意でない場合は出すというもの。

いろいろある。

わかったこと。

交通事故の場合は、生命保険でなくても任意保険があれば出る。

水桶善太郎の場合は、自賠責だけだったが、二ヶ月前に自損事故の場合を含めて最高1億円加入していた。

受取人はいずれも妻のアニー。

違反の分を相殺しても受け取り分は7千万円になること。

この保険金請求事務などの手続き代行は日本人の男性が行っていること。

その男の情報については、

氏名 山盛和夫

住所 ○○県K市○町○○番地

職業 会社員 金村建設 役職 総務部長

年齢 43歳

電話番号 ○○・・・番

、

フィリピンパブ

「ラシャイマセエ」

店に入ると例によって口々に歓迎ウエルカム「ラシャイマセー」が飛んでくる。

多々良と半田は肩をそびやかすようにして席についた。

面は割れてないが警察だっことがばれてもいい。山村とアニーとの関係をつかむ。

マネージャーに聞くという正攻法もあるにはあるがなんせ非番の隠密行動だ。それは避ける。

多々良はビールを注文した。エイミーと名乗る女がきた。エイミーは多々良の肩にしなだれかかるとすぐに

股ぐらに手を伸ばしてきた。

「この店にアニーがいるだろ。アニーは結婚してるよね。結婚する前に好きな人はいたのか？」

「ふーん。わかんない」

エイミーは首をかしげた。

「アニーのところによくくる客は？」

エイミーは多々良をしっと見る。

「なんでそんなコト、聞く」

「別にたいしたことじゃないよ」　　そう言いながら、そっと千円札を3, 4枚エイミーの手に握らせる。

「アニーを守るためだ。心配ない」

エイミーはふううとため息をつくと、

「ヤマちゃん」と言った。

ほんとの名前は知らないけどヤマちゃんと付き合ってたよ。

それからエイミーは、小声でアニーとヤマちゃんの間係を教えてくれた。

ヤマちゃんはアニーが結婚する前からしょっちゅう店に出入りしていたという。

アニーのパトロンであることもわかった。

署の内部事情

翌日、署に出勤すると半田がにたにたしながら夕べはどうも、という。あれから結局三軒はしごをした。まだアルコール

が残っている。だがそれは言わない。警察官の酒気帯び運転はかっこの新聞だねになる。

多々良は今日は山盛和夫の土建現場と金村建設を当たろうと考えている。

だが、そのためには正規の捜査任務としての許可を取る必要がある。多々良は迷った。

許可を取らずにこのまましばらく単独で捜査する方法もあるがそれはいつまでも続かない。この件は多々良の直感

では間違いなく殺人事件だ。犯人もほぼわかっている。山村とアニーだ。

犯人達は自ら手を下さずに水桶善太郎を赤信号の中に進入させる何らかの手段を用いたのだ。

それが何かはわからないが巧妙な手を使ったことは間違いない。

そのトリックは必ずあばいてみせる。

「おい。半田。この前の工事信号の事故だけどさ。あれは間違いなく事件だぜ」

「やですね、またそれですか、多々良さん」

またかという うんざり顔で半田は多々良を見た。

「だからさあ。俺あ、今からその件で署長に直談判をしにいつてくるよ」

多々良は髪を掻きむしると決心したように席を立った。半田はあきれたようにぼかんと口をあけている。

多々良の足はまっすぐ署長室に向かっていた。ドアを勢いよくノックすると中へ入っていった。

それから三十分後に多々良は署長室から出てきた。

顔面が紅潮していた。

「どうでしたか、先輩」

半田は心配顔で多々良をのぞき込んだ。

多々良は難しい顔をしている。

「一応、県警本部にお伺いを立てるとよ。だが、それまで待ってられない。内々で出直し捜査をさせてくれと

頼み込んだよ。押し問答だ」

「で、オーケーでしたか」

多々良はじろりと半田を見ると小さく頷いた。

事故として報告済みだ。捜査のやり直しをするなどよほどの証拠が出そろわない限りはできない。署長はくどいほど

それを繰り返した。それを粘りにねばった。

多々良は、最終的には県警には内緒でK市警察としてでなく安全課担当部内だけの再捜査許可を取り付けたとい

うわけだ。身内だけの内々許可だ。もちろん極秘であり関係者から漏れたりしたら署長もろとも処分をくらう。内々で

事情聴取をしたそいつがあとで署に問い合わせて来たりクレームをつけたりしたらすぐにこれはばれてしまう。

「おまけに、もしこれが事件として立件できなければおらあ首か、よくてもハコ番行きだよ。

嚴重処分は覚悟の上さ。おい半田、おまえもぼーっとしてねえで手伝え」

有無をいわざぬものがその口調にはあった。半田はこっくりとうなづいた。

」

